

東京農大栄養

渡辺 義雄

西郷 光彦

中村かほる

○青木たき子

沢村 経子

1. 我々はかねてより喫煙に関する栄養学的研究に着手し、その障害の栄養学的な回復に一定の指標を求めべく、中毒時の生体成分の変動を観察し、血清コレステロール値に関してある程度の知見を得たが、このたびさらに2,3の代謝酵素の活性の変動が、回復指標の有力な手がかりに利用できるように思われたのでこの検討をすすめている。

2. すなわち、体重 95g 前後のラットを用い、基本飼料の外に1日 1mg のニコチンを添加した区、及びニコチン（等量）にさらにわかめの不鹼化物 110mg を添加した区を設け、対照区と比較しつつ飼育し、140 日後に撲殺して採血し、その血清についてトランスアミナーゼ及びコリンエステラーゼの活性を測定した。尚前者は Reitman-Frankel 法変法、後者は Hesterin 宮崎氏法によった。

3. トランスアミナーゼ活性は、Karmen 単位でニコチン区が対照区より約20%の低下を示し、わかめ不鹼化物添加区が約10%の低下にとどまった。またコリンエステラーゼ活性は血清 1ml 当り消費アセチルコリンmg 数にして、ニコチン区が約30%減少に対し、わかめ不鹼化物添加区が20%程度の減少であった。この劣化並びにその劣化抑制の傾向は、さきの血清コレステロール値の変動に極めて近似するので、今後引続いて検討を加え確定したいと思っている。